

「新・方法」講義立会記

(. . . - / - . . .)

この講義の受講中、盛んに「同語反復」という語が繰り返されていた記憶があるが、その同語反復のみによって新・方法を理解することは、個人的に大変骨を折るものであった。現段階においてその完全な理解ができたかという点、正直なところ大変怪しいものである。「新・方法」の特徴を述べるにあたって個人的に感じたものは、「新・方法」の特徴は単独で存在するものではなく、「方法」との比較、またはその差異によるものではないかということだ。方法主義は否定的に同語反復をとらえ、それを「演じる」というある種自罰的な苦行とも取れる態度であったことに対し、新・方法主義はその態度との対称性による明確さを持っていることがあげられる。その明確さは、具体的なものにすると同語反復に対して肯定も否定も内包する状態で実践を試みている点によって確認できる。そのような何事にも受諾をゆるす精神性はある意味では新・方法の幅を広げているように感じられた。しかし、その幅の中で出会うものは私には、既視感を持って迎えられた。なぜならば、新・方法は、私の目にはその同語反復がもたらす空洞に、構成しているメンバーの記憶や主義や主張を自在に組み合わせることによって、存在しているように見えたためである。そこに、組み合わせ自体の新しさはあるものの、新・方法を構成する部分のほうへ焦点を当てるとそのパーツはどこか見たことのあるものをシミュレートしているように見えることが多々あった。端的にいうならば、組み合わせとしての全体は未視感を伴うものであったが、部分を見た場合どこか既視感を感じたということである。芸術作品は、芸術作品から生まれるという話を聞いたことがあるが、もし芸術作品が必ずしもその性質を免れないのならば、このような未視と既視の混在は当然のことであるかもしれないが。また、そのような混在は新・方法という語にあらわされるように方法主義を内包している為、共通性が見受けられることも当然のことかもしれない。方法との共通している点を挙げるとするならば、上記に加えて両者が現状を打破しようとする方向性を持っていることも挙げられるだろう。しかし、そのような動向はモダニズムという語でひとくくりにされてしまう危険性をはらんでいるように思われる。結局のところ、新・方法は、その相対化による性質のために、このようなモダニズムの呪縛に対して、明確な回答を提示しているように見えなかったように感じた。